

深イ〜話!

No.33

——雑賀正晃氏がかかれた「光をいきる」という本から——

雑賀さんのところへ一人の奥さんが訪ねてみえた。

お聞きすると、この奥さんは結婚されて2年目におじいさんが中風で倒れてしまい、全身不随になってしまわれた。それから2年経たないうちに、今度はおばあちゃんが中風で倒れて体の自由がきかなくなってしまった。それから、また2年経たないうちに、屋根葺屋さんであったご主人が、よその家の二階の屋根を葺いているときに、足をすべらせて転落し下半身不随になってしまった。

つまり結婚して5年経たないうちに、全身不随二人、下半身不随一人をかかえて、一人で田畑を耕しながら一所懸命にその三人の世話をなさってこられたのです。

村の人がかわいそうに思って

「幸い子どもさんもないことだし、いままで一所懸命に三人の方のお世話をしてきたことを村の者はみな感心しているのです。誰も悪く言う者はありません。里へ帰りなさい。ご主人の姉妹が近くに嫁いでいらっしゃるではありませんか。あなたが一所懸命お世話しているから知らん顔をしているのです。あとはどうにかなるから、お帰んなさい。」とすすめてくださるので、そうしたい気持ちと、この憐れな家族を見捨てることができない気持ちとで、どうしたらよいかわからなくて、教えてもらいたいと来られたのです。

『『どちらでもなさい』——そう答えたのでは、いかにも思いやりのない無責任な返事のように思われるでしょうが、実はどちらの道でもいけるからこそ、そういったまでのことです。

ひとつだけ、はっきりしておかなければならないことがあります。それは、『蒔いた種は生える』ということです。この世はあくまで因果の道理で動いています。いかに仏様でも、この因果の鉄則だけは曲げることができません。

三人が病まねばならないのは宿業しゅくごうであって、その面倒をみななければならないのも、またあなた自身の業ごうなのです。

それでも逃げたければ、逃げることもできます。だから、どちらでもなさいと言うのです。ただし、逃げてもことはすみません。逃げるということは、因果の果を果たさずに行くことです。種がのこっています。種が残っている以上、果の出てくることは当然で、逃げた先で果を摘むだけのことです。

そして、逃げたいという因が種となって、先で果を実らせるということになります。いまの立場でひとつの果を摘んでいくか、逃げた先で二つの果を果たすか、それだけのことです。

どちらの道でもあなたのお好きなように歩んでください。」

「お恥ずかしいことを聞きました。受けて、どこまでも背負っていきます。」

「よく言ってくださった。仏様もどんなに喜んでいてくださるでしょう。最後にもうひとつだけ聞いてください。あなたは一人で泣いているのではありません。あなたのその悲しい業^{ごう}をしっかりと握りしめて泣いてくださる方がいらっしゃるはず。そのことが分かる日がくるはず。がんばろうね」

それから、三年ほど経って、その奥さんが訪ねてこられました。

「先生、あれから2年ほど経って主人が亡くなりました。ある日のことでした。

『いっぺん抱き起こしてくれないか』というのです。上体をもちあげて柱を背にしてあげたら『お前、ちょっと前へまわってくれんか』というのです。妙なことを言うなと思いつながら前へまわりましたら、先生、なんと主人が手を合わせて『俺はなァー、いっぺん座り直してお前を拜んでから死にたかった。よく俺たちの面倒をみてくれたなァー。ありがとう。このご恩だけは絶対に忘れんよ』と私を拜んでくれました。先生、あのとき逃げなかったからこそ、この喜びがもらえたのですね。

それから、しばらくして主人が亡くなり、そのあとを追うようにして老人二人もバタバタと逝ってしまいましたが、二人とも私を拜んでくれ、安らかな死でした。逃げなくてよかったと、しみじみ思わせていただきました。

実は実家の父が田畑の仕事を手伝いに来てくれるのです。

『お前はかわいそうだ』とも『辛いだらう』とも一言も言ってくれないのです。そんな父を見て、母が生きていてくれたら、どんなにか泣いてくれよう。男親というものは実に冷たいものだ…と思ったいたのです。

ところが、ある年の秋でした。長い間、手伝ってもらって、実家の兄や兄嫁にもすまんと思ひ、少しばかりのお土産を父にことづけようと峠まで送っていったのですが、峠に着くと父は向こうを向いたまま、『もうええ、早く帰ってやれ。三人が待っとるぞ。』というものですから、『それじゃお父さん、これをお姉さんに渡してください』と言いましたら『うん』といって私の方を振り返った父の顔を、夕日のなかにはっきりと見たのです。

その父の顔が涙でクシャクシャだったのです。そのとき全身がしびれるような気持ちになりました。

私の知らないところで、父はこんなにも泣いてくれていたんだ。優しい言葉をかけてくれないのではない。かけてやりたいけれども、涙が先に立って言葉にならなかったのだと。

本当は全文載せたかったのですが、簡略して、抜粋しました。

全文読みたい方は、ご遠慮なくお電話ください。コピーお送りします。

不思議ですね。二年ほど前にこれを読んだときは何も感じなかったのに、最近読んだら、無性に涙があふれました。それで、今回載せてみました。